

# Nara Women's University

## 梅娘の女性観にみえる戦前・戦後の連続性:近代主婦像の受容と展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学日本アジア言語文化学会 公開日: 2022-09-06 キーワード (Ja): 近代中国, 女性観, 日本占領下, 梅娘 キーワード (En): 作成者: 羽田,朝子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/5835">http://hdl.handle.net/10935/5835</a>

# 梅娘の女性観にみえる戦前・戦後の連続性

——近代主婦像の受容と展開——

羽 田 朝 子

## 1. はじめに

日本占領地の中国文学に関する研究は、戦前・戦後で分断される傾向にあり、その連続性について目を向けられることが少なかつた。この背景には、次のような事情がある。占領地の中国人作家の政治的・民族的境遇は戦前・戦後で劇的に変化したことから、政治的・民族的な観点から見ると、その文学も戦前・戦後で大きく様相を変えているためである。

これに対し本論で注目したいのは、近現代を生きる中国知識人にとって、民族主義と同様に、近代化は一貫して共通の課題の一つであったことである<sup>1</sup>。この観点から考えてみると、戦前・戦後の文学に連続性を見出すことができ、それによって占領地におかれた中国人作家の複雑な精神をより深く理解することが

できるのではないだろうか。

満洲国や日本占領下の北京で活動した女性作家・梅娘（本名・孫瑞嘉、一九一六～二〇一三）についても、その研究において戦前・戦後の連続性について着目されることがなかった。梅娘は一九三六年に満洲国で作家活動を始めた後、日本滞在を経て日本占領下の北京に移り、四一年から華北文壇を代表する女性作家として活躍した。戦争末期には日本の文化政策に関わり、四四年十一月の大東亜文学者大会で中国代表として大会宣言文を読み上げたほか、短編小説集『蟹』（武徳報社、一九四四年十一月）によって第二回大東亜文学賞を受賞した。そして終戦間際には「為日本婦女祝福」（『婦女雜誌』六卷五・六期、一九四五年六月）を発表し、戦争に協力する日本女性を称賛した。しかし四九年に中華人民共和国が成立すると一転して作品のなかで共

産党政府を支持する態度を見せている。

これについて先行研究では、梅娘が戦前・戦後で政治的態度を大きく変えたことから、その政治思想や民族主義における矛盾を指摘している。<sup>2)</sup>しかし、それ以上は深く検討されることはなく、その思想的背景についてはいまだ不明なままである。

これに対し、本研究が着目するのは以下の三点である。まず一点目は、梅娘がその文学において戦前・戦後の文学を通じて女性をモチーフにしており、女性に関心を寄せてきたという点で、明確な一貫性を持っていることである。そして二点目は、近代において女性の近代化は一貫して知識人にとって取り組むべき課題の一つだったことである。とくに女性知識人にとっては自らの問題でもあったことから、その多くが女性の近代化に関心を寄せていた。そしてそれは梅娘も例外ではない。<sup>3)</sup>三点目は、梅娘が日本滞在期に女性観の上で日本の影響を大きく受けたことである。梅娘は日本滞在を経て占領下の北京での活動のなかで日本女性にたびたび言及しており、その中に反映された女性観は戦後の作品にも引き継がれている。

梅娘が日本と深い関わりを持った時期はちょうど自身が妻や母となるなど、女性としての転機とも重なっていた。そして女

性の近代化については、日本が中国よりやや先行する形で女子教育の振興や女性の啓蒙が推し進められていた。女性の近代化という点で中国と同じ課題を抱える日本に対し、梅娘が関心をもち、あるいは影響を受けたとしても何ら不思議ではない。

そこで本論では、梅娘が日本滞在期にどのような女性観を形成したのか、そしてその女性観に見える戦前・戦後の連続性について検討する。これにより、日本占領下という民族的・政治的な危機におかれた中国知識人の複雑な精神について解き明かしたい。<sup>4)</sup>

## 2. 戦前における女性観の形成

### (1) 日本での近代的主婦像への接触

梅娘は一九一六年に長春の実業家である父親のもとに生まれ、裕福な少女時代を過ごしたが、幼い頃に妾であった生母が自殺するなど、女性の悲劇を身近に見て育った。<sup>5)</sup>満洲国が成立したのは、梅娘が吉林省立女子中学に在学中のことである。その後、梅娘は吉林省立女子師範高中部を卒業し、三六年から満洲国機関紙『大同報』で文学活動を始めた。そして三七年に同紙の文藝欄の編集者であった柳龍光(一九一五〜四九)と恋愛結婚して

いる。

結婚後間もなく柳が大阪に本社がある『華文大阪毎日』(大阪毎日新聞・東京日日新聞発行)の編集を担当することになったため、梅娘は三八年十一月に渡日した。大阪・神戸間にある西宮市に移り住み、その後四一年十一月に北京に移るまで三年の間ここに暮した。

梅娘が滞在した時期の日本は、日中戦争の勃発により総動員体制の暗い影が差し始めていたものの、三〇年代に隆盛した昭和モダンと呼ばれる近代文化がまだ活気を維持していた。四一年十二月に太平洋戦争が始まると、戦争が激化して深刻な物資不足に陥り、また連合国による日本本土への空襲も始まったことから、本格的な破滅へと向かっていくが、梅娘はこれを目にすることなく帰国している。

梅娘の滞在当時の日本社会では、明治期以来の女子教育の普及により良妻賢母思想が広く浸透していた。この良妻賢母主義とは、前近代的な伝統的女性観を指すのではなく、欧米の近代国家にも共通する近代思想の一つである。それは、女性が国民国家の一員として家庭内の責任を受け持ち、さらに科学的知識に基づき合理的・効率的な生活を運営し、子どもに近代的な教

育を施して次世代の国民を育成するというものである。とりわけ当時にあって「良質」な国民養成が強く求められたことから、子どもに近代知識と愛情をもって家庭教育を行う母の役割がとくに強調された。

そして当時の日本では二〇年代から都市化が進んだことにより、都市部の中間層ではサラリーマンの夫と専業主婦の妻からなる家庭が一般化し、この良妻賢母主義を体現する近代的主婦が社会に広く出現していた。

また二〇年代から三〇年代にかけてマスメディア市場が拡大し、書籍や新聞雑誌が大衆化したことから、女性向けのメディアが数々登場していた。主婦を対象にした商業婦人雑誌『主婦之友』(一九一七)、『婦人倶楽部』(一九二〇)などが登場し、家事育児の実用記事を紹介していた。また女学生を対象にした少女小説が登場し、たとえば『赤毛のアン』や『あしながおじさん』といった西洋の少女小説の翻訳のほか、吉屋信子に代表される日本人作家による作品も数多く出版された。これらは女性たちに教養や娯楽を与えるとともに、良妻賢母主義の規範強化装置としての役割を果たしていた。

とくに梅娘が居住した大阪・神戸間は、当時の日本でも近代

化が進んだ地域であり、その一帯には後年「阪神間モダニズム」と総称されることになる近代的なブルジョワ文化が花開いていた。この地域には大卒のインテリサラリーマンなど中流階級が居住し、彼らを対象とした文化的施設が多数造られていた。女子教育の面でも先進的であり、明治期に私立の中等教育機関が公立の高等女学校に先駆けて設立されており、ミッションスクールの神戸女学院（一八七五）や親和女学校（一八八七）、松蔭女学校（一八九二）などが著名である。さらに一九二〇年代から三〇年代にかけては私立の女学校がこの地に次々と誕生している。<sup>11</sup>

梅娘はこうした環境のなかで神戸女子義塾（詳細は不明）という私立学校の家政科で学び、同時に大阪の新聞社に通勤するサラリーマンの夫と二児の子どもをもつ主婦として生活した。<sup>12</sup> 梅娘は日本滞在中の一九四〇年に『主婦之友』に掲載された吉屋信子のルポルタージュを翻訳していることから、彼女が当時の日本の婦人雑誌や女性作家の作品に触れ、関心を持っていたことは確かである。<sup>13</sup> また現地の中流階級の日本人女性と交流を持ち、日本の近代主婦像に強い印象を受け、次節で後述するように、その印象を帰国後に複数の文章のなかで言及することになる。<sup>14</sup>

## （2）近代主婦像に関する言説の展開

梅娘は日本滞在を終え、日本占領下の北京に移った後、丹羽文雄『母の青春』（『民衆報』一九四二年八月一日～九月二日）、石川達三『母系家族』（『婦女雑誌』三卷十一期～四卷九期、一九四二年十一月～四三年九月）、細川武子の少女小説『女学生記』（『婦女雑誌』五卷五、七～九期、四四年五、七～九月）を翻訳している。これらはいずれも梅娘の日本滞在中に発表され、とくに後者の二作品は当時の日本社会で大きな話題になっていた作品であった。<sup>15</sup> このことから、梅娘は日本でこれらの作品に触れたものと考えられる。そしてとくに『母系家族』、『女学生記』には、当時の日本社会で関心が高まっていた母性保護の問題や、社会に広く普及していた良妻賢母主義が反映されていた。

『母系家族』は母子家庭の支援施設である母子寮を舞台に、母子家庭の救済や母性保護といった女性問題が描かれている。この母性保護の必要性は一九一八年から日本社会で多くの女性運動家によって提唱され、その結果として三七年に「母子保護法」が制定され、母の権利拡大が図られた。『女学生記』は、当時高等女学校の副校長だった細川が日頃の観察をもとに女生の生活を描いた少女小説である。そこには女学校に通う少女

たちの旺盛な知識欲や繊細な心情が描きだされており、作品中においては彼女たちの将来は良妻賢母——近代的主婦が想定されている。<sup>16</sup>

以上の翻訳からは、梅娘の良妻賢母主義や近代主婦像に対する強い関心が窺えるが、梅娘は自らの文章においてもこれらを支持する言説を数多く発表している。梅娘は自らの女性観について日本滞在以前においては言及することがなかったことから、日本での経験がその女性観に強く影響したものと考えられる。

これらの文章のなかで梅娘はとくに日本の主婦像に強い共感を示しており、例えば「佐藤太太」(『藝文雜誌』一卷三期、四三年九月)では、日本滞在期に知り合った料理上手な隣人の日本人女性「佐藤の奥さま」を例に、日本の主婦の高い生活力や愛情に満ちた家庭生活を紹介している。そして「為日本婦女祝福」でも、日本滞在中に日本の「家庭の経済力が豊か」で「文化的」であるのに驚き、これは「女性たちの大きな生活力の表れ」だと感じたと述べている。さらに近隣に住む主婦たちが実に時間を効率的に使い、自らの手で子どもたちを衛生的に合理的に育てながらも、精神的なゆとりを持って暮らしていたことを称賛している。

そして日本人女性が体现する近代的主婦像——とくに母性を称賛し、梅娘は次のように述べている。「日本の母の心は太陽のように偉大で光と熱に満ちており、あんなにも我慢強く、あんなにも温和であんなにも時に適った励ましをし、家の中をいつも和気藹々としたものにしていきます。子どもを時間通りに学校へ行かせ、夫を時間どおりに出勤させ、規律の中で快楽を求め、母は一粒の真珠の核のように、彼女を取り囲む子どもや夫に永遠に正しい生活を過ごさせているのです(日本の母親的真心の跟太陽一樣の偉大、充滿了光和熱、那樣耐性、那樣溫存、那樣恰當其時的鼓勵、家裏總是一團和氣、孩子按時去上學、丈夫按時去上班、在規律中尋求快樂、媽媽仿佛一顆珠子的軸心一樣、使圍繞著她的孩子和丈夫永遠過著正常的生活)」。

同時に梅娘は女性が主婦として家を取り仕切るだけでなく、社会に貢献しうる存在であるべきことを強調している。例えば『婦女雜誌』の読者欄「覆小姐姐」(四卷七期、四三年七月)では、読者の悩みへの回答を通じて自らの女性観を披瀝しており、次のように述べている。「私はひとりの女性は自分を左右することができるだけでなく、ひとつの家やさらには社会の一部分までも左右することができるのだと考えています。様々な方法で

夫を善良にし、正直でかつ仕事に熱心に取り組ませ、夫をとりまく社会をよりよいものにすることが出来ます。子どもを聡明で立派にさせ、偉大で下劣でなくさせ、子どもを取り巻く人々に利をもたらすことができるのです（我這樣以為，一個女人不但能左右自己，且能左右一個家甚至一部分社會。我能想盡方法使我的丈夫良善，正直且對工作熱心，則圍繞我丈夫身邊的社會一定能受惠，我能使我的孩子聰明有為，偉大而不卑鄙，則圍繞我孩子的人們也一定受惠）」と。

『婦女雜誌』で行われた「日中女性座談会」（五卷八期、四四年八月）でも次のように発言している。「現代の良妻賢母とは、妻や母として現代的な意識を持ち、その家庭生活を時代の進歩と歩調をともしする人に他なりません（時代的賢妻良母，不外是作妻作母親的人具有時代意識，使家庭生活所處的時代進展的步驟一致）」と。

また梅娘は「為日本婦女祝福」において、戦時下にあつて国防のために労働する日本女性についても讚えているが、文章全体を見てみるとその描写の重点は戦争協力そのものではなく、女性が強い国家意識を持ち、民族や社会に対する責任を担うことにあつたといえる。その文章の結びでは、次のように述べて

いる。「戦争は一時のことですが、女性の国家や民族、社会に対する責任は、尽きることがありません（我相信戦争是一時的，但是女性對於國家民族社會的責任，是無窮盡的）」と。

### 3. 戦後への連続性——五〇年代における

#### 主婦視点による随筆から

一九四五年に日中戦争が終結し、四九年に中華人民共和国が成立すると、梅娘は北京の中国農業電影制片で脚本を作成する仕事に就いた。しかし反右派闘争や文化大革命の時期には、梅娘は資産階級の出身であることや戦前に日本と関わったことが問題となり、激しい批判にさらされた。その後七八年に名誉回復がなされるまで、創作活動をする事ができなかった。

しかし梅娘は五二年から政治動乱が本格化する五七年までの五年の間に、上海の『新民報』晩刊、香港の『大公報』で数々の作品を発表しており、その数はそれぞれ六八篇、一九篇にも上る。この期間の梅娘の文学活動については不明な点が多かったが、近年、莊培蓉の研究（二〇一六年）によって資料の整理が進んだ。梅娘は戦後の活動では筆名を変えており、梅琳・高翎・劉遐・瑞芝の筆名で小説（五篇、連載は一篇と数える。以下同

じ)を、柳霞児の筆名でルポルタージュ(三篇)を、孫翔・雲鳳の筆名で随筆(七九篇)を発表している<sup>17)</sup>。

こうした基礎研究をもとに、筆者が調査を進めたところ、この時期の随筆には主婦——とくに母親としての視点から日常生活や社会を描いた作品が含まれており、その数は三五篇にもわたっていることが判明した(作品の詳細は以下の【表】のとおりである)。その内訳は『新民報』晩刊掲載が十九篇、『大公報』掲載が十六篇であり、このうち『新民報』の五篇は「児童故事」欄、一篇は「家常閑話」欄、一篇は「生活故事」欄に掲載され、『大公報』の十六篇は「主婦手記」というシリーズ名が付けられている。『新民報』に掲載されたものうち七篇は『大公報』掲載の作品を改作したものであるが、国家や社会主義に対して賞賛する態度をやや強く打ち出しているほかは、内容の大きな改変はない。

これらの随筆は、大衆向けの新聞に掲載されたものであるため、個々の作品は極めて短く、内容も簡單明瞭であり、文学的価値よりも民衆に対する文化教育を重視したものであるといえる。しかし作品には、梅娘の近代的主婦像——とくに母性を重視する女性観が明確に反映されており、戦前からの女性観が戦

梅娘の女性観にみえる戦前・戦後の連続性

後にも引き継がれたことがわかる。以下、作品について具体的に作品を見ていく。

【表】一九五〇年代における梅娘の主婦視点による随筆

項目	筆名	タイトル	掲載紙	発表年月日	掲載欄	備考
20	雲鳳	後海泛舟	『大公報』	1954.06.30	主婦手記	
19	雲鳳	大風雨中的小故事	『新民報』晩刊	1954.06.23		17の改作
18	雲鳳	母女之争	『大公報』	1954.06.21	主婦手記	
17	雲鳳	暴風雨中的小故事	『大公報』	1954.06.15	主婦手記	
16	雲鳳	三人都变蝴蝶	『大公報』	1954.06.07	主婦手記	
15	雲鳳	萬綠叢中一點紅	『大公報』	1954.05.18	主婦手記	
14	雲鳳	小翔回家	『新民報』晩刊	1954.05.10	生活故事	10の改作
13	雲鳳	甜水井與苦水井	『新民報』晩刊	1954.05.04		9の改作
12	雲鳳	同行是親家	『新民報』晩刊	1954.04.29	主婦手記	11の改作
11	雲鳳	車上友誼	『大公報』	1954.04.23	主婦手記	
10	雲鳳	孩子回家	『大公報』	1954.04.08	主婦手記	
9	雲鳳	甜水井與苦水井	『大公報』	1954.04.01	主婦手記	
8	雲鳳	街頭廣播	『大公報』	1954.03.31	主婦手記	
7	雲鳳	麵粉袋的商標	『大公報』	1954.03.29	主婦手記	
6	孫翔	真正的第一	『新民報』晩刊	1953.07.30	児童故事	
5	孫翔	愛哭的小蔭梅	『新民報』晩刊	1953.03.27-28	児童故事	
4	孫翔	做風箏	『新民報』晩刊	1953.03.14	児童故事	
3	孫翔	柏年的家庭作業	『新民報』晩刊	1953.03.04-05	児童故事	
2	孫翔	小美麗	『新民報』晩刊	1953.03.01-02	児童故事	
1	孫翔	孩子罵人	『新民報』晩刊	1953.02.26	家常閑話	



21	雲鳳	小女兒履行守則	『大公報』	1954.07.06	主婦手記	
22	雲鳳	太平花	『大公報』	1954.07.07	主婦手記	
23	雲鳳	文蓉的婚禮	『新民報』	1954.07.11		18の改作
24	雲鳳	小女兒的一條守則	『新民報』	1954.07.12		21の改作
25	雲鳳	一顆番茄	『新民報』	1954.10.09		
26	雲鳳	木製的「花樹」玩具	『大公報』	1954.10.12	主婦手記	
27	雲鳳	木製的「花樹」玩具	『新民報』	1954.11.01		26の改作
28	雲鳳	一株茉莉	『大公報』	1954.11.02	主婦手記	
29	孫翔	學校與家庭	『新民報』	1954.12.27		
30	雲鳳	北京街頭見荔枝	『大公報』	1955.06.09	主婦手記	
31	雲鳳	開吧！曼妙的芍藥	『大公報』	1955.06.14	主婦手記	
32	孫翔	講詩經	『新民報』	1956.12.17		
33	孫翔	五粒小堯豆	『新民報』	1957.01.10		
34	雲鳳	媽媽的感謝	『新民報』	1957.03.11		
35	雲鳳	與女兒相處	『新民報』	1957.03.19		

### (1) 家庭の日常生活の描写

梅娘は四九年に夫の柳を海難事故で失ったことから、戦後は三人の子どもを女手一つで育てることになったが、作品にはそうした自らの生活の経験が反映されている。ちなみに、作品の筆名の一つに「孫翔」が用いられているが、これは梅娘の末子の名前と同じである。<sup>18)</sup>

これらの作品には、まず主婦の視点から日常生活を描写した

ものが多く含まれており、家事（7、25）や自然（15、20、22、28、30）に関わる事柄や、市井の人との交流（11、12、16、23）が描かれている（括弧内の番号は表中の項目番号を指す。以下同じ）。ここからは梅娘の合理的な生活感覚や家庭の日常生活を愛する繊細な感受性を読み取ることができる。

また同時に、作品の中で日常生活の視点から社会や国家の在り方に言及することも多々あり、そこからは自らがその社会や国家の一員であるという態度が見いだせる（7、11、12、18、23、25、28）。

例えば「麵粉袋的商標」（7）は、台所の布巾に転用しようとした小麦粉の袋が、しっかりとした生地で美しい文字で商標がプリントされているのを見て、子どもの服の裏地や枕カバーにしようと考え直す、という内容である。ここからは主婦としての合理的な生活感覚を窺うことができる。また社会のあり方にも言及しており、現在の社会では小麦粉の袋の品質が大きく向上していることから、利潤追求に偏っていた前時代の社会との違いを実感したと述べている。

また「一顆番茄」（25）は、天候不順による野菜不足のなか、トマトを食べたがる子どもたちのためにあちこち探しまわり、

ついにトマトを手に入れるという内容である。作品からは、世の中の野菜不足を憂慮する生活感覚や、子どもが好むものを食べさせたいという母親としての深い愛情が読み取れる。それとともに手に入れたトマトは「農業生産合作社」の研究によって栽培されたものであることも言及し、天候不順にもかかわらず良質なトマトを生産しうる国家を称賛している。そして最後は「これはこの非凡な国家が私たちに与えた幸福である（這就是這個非凡的國家所給與我們的幸福）」という言葉で結んでいる。

## （2）「現代の母親」としての自覚

作品の中で大半を占めるのは子どもに関する随筆であり、二四篇にもとぼる。このなかには梅娘と自らの子どもとの日常生活を描いたものが含まれており（8、10、13、14、17、19、31）、彼女が母親として子どもに関心を寄せ、その成長を喜ぶ心情が表現されている。ここからは梅娘の子どもへの溢れる愛情や強い母性を読み取ることができる。例えば「孩子回家」「小翔回家」（10、14）では、子どもの通院の帰りに子どもだけを三輪車に乗せて家に帰し、自分は職場へ出勤したものの、仕事でも子どもが気がかりでならない母親の心情が描かれる。また「暴風雨中の小故事」「大風雨中の小故事」（17、19）では大雨の日に帰宅

を急ぐなか、思いがけず駅に傘を持って迎えに来てくれた子どもとの愛情に満ちたエピソードが語られている。

なかでも子どもの教育、とくに情操教育をモチーフにしたものが多く含まれており（1、5、6、10、21、24、26、27、29、32、35）、これに関する梅娘の関心の高さが窺える。これらの作品の中で、梅娘は自身が経験した出来事やエッセイ風の物語を通じて、家庭教育のあり方や、人との協力や思いやりの大切さ、子どもに家庭内の労働をさせることの重要性などを説いている。そして子どもに与える母親の影響についても処々で語っている。

例えば「講詩經」（32）では、十二歳の娘が『詩經』の一節について疑問を持った際に、専門家のように難解な解説をするのではなく、日常生活の親しみのある例を用いて連想させ、娘の想像力を育むという、母親としての家庭教育の経験が述べられている。

また「媽媽的感謝」（34）では、児童向けの雑誌『小朋友』を発売している出版社への感謝の念を述べている。自身の子どもが愛読者であり、この雑誌を通じて日常生活や社会、歴史に関する知識、算術や絵の描き方を学んだことを挙げている。「木製の「花樹」玩具」（26、27）では、新発売の木製のおもちゃ

が子どもの情操教育に大きな効果があったことについて、喜びを込めて伝えている。そしてこのおもちゃは雑誌『ソ連婦女（蘇聯婦女）』にも紹介が掲載されており、やはり同じ母親から好評を得ていることを紹介している。

そして「小美麗」（2）では、可愛らしく成績優秀で作文も抜群にうまい末っ子の少女が、他の兄弟やクラスメイトを馬鹿にするようになったことに気づいた母親が、植物を育てることを通じて人との協力や思いやりが大切であることを教える姿が描かれている。

これらの作品には、全体的に母親としての強い自覚が表れており、例えば「学校與家庭」（29）では、仕事が多忙であったけれども「現代の母親としての責任感（時代母親的責任感）」から、子どもの学校の保護者会に参加したことが語られている。

#### 4. 国家や社会との協同

以上のように、これらの作品には梅娘が戦前に展開していた近代的主婦像と共通する女性観が反映されており、このことから梅娘が戦後もこうした女性観を引き継いだことが分かる。その一方で、こうした連続性に着目した結果、戦前・戦後に

おける大きな違いとして浮かび上がってくるのは、作品に表出している現前の国家や社会への態度である。戦前の近代主婦像に関する言説において、梅娘は女性が社会や国家へ貢献しうる存在であるべきだとしていたものの、自らが身を置く日本占領下の社会について言及することはなかった<sup>19</sup>。しかし戦後の作品においては、社会主義体制下の国家や社会について積極的に語り、それに対する肯定的な立場を明らかにしている。

例えば作品のなかでは、愛すべき子どもを育む社会や国家に対する感謝が様々な形で述べられている（8、10、13、14）。例えば「街頭廣播」（8）では、雪が降った寒い日に、街の放送で「市人民ラジオ局の女性アナウンサー（市人民廣播電台的女播音員）」が母親たちに向けて子どもたちが風邪をひかないよう注意喚起するのを「私」は耳にし、母親として感動する。そして次のようにいう。「一人の母親としての心情から言うと、周りの人たちがみな自分の子どもを大事にしてみたい、自分ができるのと同じようにかわいいた子どもを温かくいたわって欲しいと思うものだ。北京においては、どの母親もみな北京の各機關団体が子どもたちにどれほど深く配慮がなされているかを身にしみて理解している（以一個作爲母親的心來講，就是希望周圍的

人都關切自己的孩子，像自己一樣賦予可愛的孩子以最溫柔的愛護。在北京，每個母親都體會到了北京各機關團體給與孩子們多麼深厚的照顧」と。

またそうした国家や社会への支持は、作品に描かれる子どもの教育のあり方にも反映されている。例えばエッセイ風の物語「孩子罵人」(1)は、主人公の母親が自分の子どもが汚い言葉で人を罵るようになったのに驚き、その理由を調べてみると、隣家の子どもの影響であることを知り、子どもに対し再教育をする過程を述べている。この物語で子どもにも悪影響を与えた隣家の子どもの父親は元地主であり、母親はかつてアヘンを吸っていた旧式の女性として描かれている。主人公の母親は子どもを矯正するために隣家の子どもとの交遊を禁じ、地主の悪徳を説いている。

そして注目すべきは、作品中で子どもの教育において社会や国家と協同する姿勢が表現されていることである。作品にはたびたび学校の「先生」や「指導員(輔導員)」が登場し、彼らから指導を受けたり、あるいは協力体制を敷いたうえで子どもを教育する姿が描かれている(2、3、21、24、35)。例えば「柏年の家庭作業」(3)では、不真面目で勉強嫌いな子どもにも手

を焼いた母親が、学校の先生から物語を読み聞かせるのがよいと指導を受け、それにより子どもの意欲を高めることに成功する。また「小女兒履行守則」「小女兒的一條守則」(21、24)では、指導員の指導により家庭内の労働をするようになった子どもが整理整頓や身だしなみといった生活習慣を向上させ、また「与女兒相處」(35)では、娘の学校の友人とのトラブルを指導員の励ましを得ながら解決するというエピソードが描かれている。

もちろん、これらの作品群に見られる社会主義体制下の国家や社会に対する態度が、どれだけ梅娘の本心であったのかは判別が難しい。梅娘は当時すでに知識人に対する思想改造運動や粛清キャンペーンに巻き込まれており、一九五二年には資産階級に認定されて批判を受け、五五年には日本のスパイの嫌疑をかけられている<sup>20</sup>。そのため作品に表現された支持や協同が、こうした思想統制の影響によるものだったことも否めない。

ただし本論が着目したいのは、近代的主婦像において国家や社会との協同は重要な要素であったという点である。これについて戦前の日本でも関連する女性論の中で盛んに語られていたが<sup>21</sup>、梅娘は戦前の言説において、日本占領下の社会との協同に

ついでに沈黙し、何も語っていない。このことから、日本占領下においては民族主義的な問題により忌避したものの、戦後においてはそれが解消したことから積極的に語ることを選択したのではないだろうか。とすれば、梅娘の近代的主婦像に関する女性観は、戦後の五〇年代に完全な形で展開されたと言える。

## 5. おわりに

梅娘が滞在した一九四〇年前後の日本では、女子教育の普及により良妻賢母思想が広く共有され、近代的主婦像を体現する女性が社会に広く出現していた。こうした日本の近代女性像は梅娘に深い印象を与え、帰国後に梅娘は占領下の北京での活動の中で、日本人女性をモデルにした近代的主婦像や母性によって社会や国家に貢献する女性像を強く支持することになる。

そしてこうした女性観は、戦後五〇年代に発表された梅娘の作品群にも引き継がれたのである。また梅娘の母性を重視した女性観は、それを反映した一連の随筆が香港や上海のメディアに数多く掲載されたことから、戦後の香港はもちろん、共産党政権下の社会で理想とされた女性像にも合致するものであり、少なくとも五〇年代半ばまでは当時の社会に広く受け入れられ

ていたと考えられる。

ただし、梅娘は戦前において日本の近代的主婦像を肯定的に捉えていたものの、日本や日本占領下の社会を肯定、あるいはそれとの協同を目指すことは決してなかった。このことから、梅娘は戦前において日本に対して「女性の近代化」の面では意識を共有し、その影響を受けていたものの、政治的には明確に距離をとっていたことがわかる。

こうした梅娘の女性観をめぐる言論からは、日本占領下という困難な状況の中で、民族的・政治的な危機にさらされながらも、自らの民族にとって有益な近代性を摂取し、自らの社会や国家の前進を図ろうとした知識人の姿を見出すことができる。

なお付言しておきたいのは、本論で着目した作品は女性知識人として啓蒙の立場から執筆した文章や随筆であったが、これらと文学作品との間では大きな違いがあったということである。戦前・戦後を問わず梅娘の小説に描かれる女性像やナショナルイメージは、ジェンダーや民族、階級といった様々な要素が交錯する、より複雑な様相を見せている。例えば戦前においては近代的主婦を含む近代家庭の不条理が描かれ、戦後には共産党

政権下の社会における葛藤も表現されている。<sup>22</sup> こうした文学作品における複雑性については稿を改めて論じたいと思う。

- 1 二〇〇〇年代以降の上海モダニズム研究では、近代以降の中国知識人は日本に「侵略者」としての側面のほか「近代化の手本」としての一面を見出しており、とくに文化領域においてはその一面に対する態度によって、彼らの思想に多様性が生まれていたことが指摘されている。史書美『現代の誘惑——書写半殖民地中国的現代主義（1917-1937）』（江蘇人民出版社、二〇〇七年）参照。

- 2 例えば陳言『忽值山河改——戦時下的文化触変与異質文化中間人的見証叙事（1931-1945）』（中央編訳出版社、二〇一六年）では、梅娘が一九四六年に長春で国民党が東北で創刊した雑誌『第一線』の編集に当たり、その記事の中で共産党に対し批判的な態度をとったことを明らかにしている。莊培蓉『迎合、背離与反思——梅娘一九五〇年代作品研究』（華東師範大学修士論文、二〇一六年）では、梅娘が五〇年代の作品においては基本的に共産党に対して肯定的な態度をとったことを指摘している。

- 3 梅娘の女性観については、張志晶「梅娘と『婦女雜誌』」（『東アジア比較文化研究』五号、二〇〇六年八月）、陳言「梅娘与『婦女雜誌』」、「《実報》関係的考釈」（『忽值山河改』前掲）、周潔

梅娘の女性観にみえる戦前・戦後の連続性

- 「一九四〇〜一九四五年淪陷区報刊的複雜面相——以《婦女雜誌》中「新母親」形象書寫為中心的考察」（『大慶師範學院學報』三七卷一期、二〇一七年一月）などがある。ただし、いずれも梅娘の戦後の女性観については取り上げられていない。梅娘が生まれ育った満洲での女性の境遇や女子教育の状況については、蘇林・佐々木啓「滿洲国」における中国人女子教育」（『早川紀代・李煒娘・江上幸子・加藤千香子編』『東アジアの国民国家形成とジェンダー』青木書店、二〇〇七年）を参照。

- 4 戦前における梅娘の女性観については、すでに拙論『『婦女雜誌』にみえる梅娘の女性観——近代的主婦像と「国民の母」』（『現代中国』九二号、二〇一八年）において論じている。当該論文では日本での日本経験の影響と占領下北京で発行されていた『婦女雜誌』上の言説を中心に取り上げた。本論ではとくに戦前・戦後の連続性に着目し、検討したい。

- 5 梅娘「我的青少年时期」（張泉編『尋找梅娘』明鏡出版社、一九九八年）を参照。

- 6 時代背景については、アンドルー・ゴードン「消費、生活、娯楽の「貫戦史」」（倉沢愛子・杉原達ほか編『日常生活の中の総力戦』岩波書店、二〇〇六年）を参照。

- 7 近代日本における良妻賢母思想とその普及については、小山静子『家庭の生成と女性の国民化』（勁草書房、一九九九年）、

- 『良妻賢母という規範』（勤草書房、一九九一年）を参照。
- 8 小山静子『子どもたちの近代―学校教育と家庭教育』（吉川弘文館、二〇〇二年）を参照
- 9 木村涼子『へ主婦』の誕生―婦人雑誌と女性たちの近代』（吉川弘文館、二〇一〇年）を参照。
- 10 久米依子『少女小説』の生成（青弓社、二〇一三年）を参照。
- 11 阪神間モダニズムについては、阪急沿線都市研究会編『ライフスタイルと都市文化・阪神間モダニズムの光と影』（東方出版、一九九四年）、竹村民郎『阪神間モダニズム再考』（三才社、二〇一二年）を参照。
- 12 『大同報』の記者堅矢は、梅娘の日本滞在中に彼女の自宅を訪れており、その訪問記を同紙に掲載している。ここでは、梅娘が一家の主婦として科学的かつ規律ある生活を取り仕切り、よく夫に尽くし子育てをしていることを伝えている。堅矢「六甲山下訪梅娘―赴日視察別記之一」（『大同報』一九三九年十二月十九日）を参照。
- 13 梅娘は吉屋信子「満洲大陸の土に生くる人」（『主婦之友』一九四〇年十一月号）を「曠野上の人門」（『大同報』一九四〇年十一月二〇日、二七日）というタイトルで翻訳発表している。このほか同じく日本滞在期に、岡田植子の「満洲紀行・車窓風景」（初出不明、一九四〇年に執筆され、後に『病院船従軍記』主婦之友社、一九四三年に収録）を「寄自北滿之旅」（『大同報』一九四〇年十二月十九日、二十五日）というタイトルで翻訳している。岡田がこの作品を執筆した背景は不明だが、中島佐和子「岡田植子（ヘフェミニスト）の翼賛」（『昭和前期女性文学論』翰林書房、二〇一六年）によれば、当時岡田は女性雑誌『新女苑』の特派員として満洲を訪れていたという。そのため、その際のルポルタージュだったのではないかと考えられる。
- 14 代表的なものに、梅娘「佐藤太太」（『藝文雑誌』一卷三期、一九四三年九月）、梅娘「為日本婦女祝福」（『婦女雑誌』六卷五・六期、一九四五年六月）がある。
- 15 丹羽文雄『母の青春』は明石書店から一九四〇年十月に発行された。石川達三『母系家族』は『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』で連載された新聞小説（一九四〇年六月十一日〜十一月八日）であり、連載終了後すぐに単行本『母系家族』（新潮社、四〇年十二月）が出版された。細川武子『女学生記』（有光社、四一年三月）は、発行から半月あまりで二版を重ねる大ベストセラーとなった。これらは発表後、半年も経たないうちに映画化されており、『母系家族』（日活多摩川）は四一年一月三日、『女学生記』（東京発声映画製作所）は四一年八月二七日に公開されている。
- 16 『女学生記』には複数の女学生が登場するエッセイ風の短編小

- 説が四五篇収録されており、梅娘はそこから五篇（二度目の春「兄さん」「家」「女」「千人針」）を選んで翻訳しているが、これらからも本文に述べた作品の趣旨を十分読み取ることが出来る。
- 17 以上、莊培蓉『迎合、背離与反思——梅娘一九五〇年代作品研究』（前掲）の研究による。莊の研究では戦後の作品分析を通じて梅娘が共産党政権に対しどの程度承認していたかを論点にしているが、戦前との連続性については着目していない。
- 18 陳言『忽值山河改——戦時下の文化触変与異質文化中間人的見証叙事（1931-1945）』（前掲）収録の「附録2梅娘年譜」（二一五頁）を参照。

- 19 日本占領下の北京で発行された『婦女雜誌』（華北文化書局、一九四〇～四五年）において、多くの女性論が発表されたが、そのなかには女性に対し日本占領下の社会への貢献を求めたり、ひいては大東亜戦争の正当性や日中提携にも言及するものもあった。梅娘もこの雑誌で論説や翻訳作品を発表していたが、こうした政治的な話題については語っていない。以上については、拙論『『婦女雜誌』にみえる梅娘の女性観——近代的主婦像と「国民の母」』（前掲）を参照。

- 20 莊培蓉『迎合、背離与反思——梅娘一九五〇年代作品研究』（前掲、一〇頁）参照。

- 21 小山静子『子どもたちの近代——学校教育と家庭教育』（前掲、

梅娘の女性観にみえる戦前・戦後の連続性

- 22 「家庭教育と学校教育」「家庭の子ども」九六～一七六頁）を参照。梅娘の五〇年代の小説については、莊培蓉『迎合、背離与反思——梅娘一九五〇年代作品研究』（前掲、二四～三二頁）が検討している。

〔附記〕

- 本稿は科研費（18K00346）の助成をうけている。また二〇二一年一月二四日開催の「東亜植民地主義與文学会議」年度大会（台湾・清華大学、オンライン開催）で発表した内容を再構成したものである。

——はねだ あさこ・秋田大学准教授